

桐壺 (光る君と輝く日の宮)

訳 坂東 忠義

桐壺 (光る君と輝く日の宮) №1

源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、まして繋ぐ渡らせたま

※2 御方はえ恥らあへたまはず。いづれの御方も「我人に劣らむ

と思いたるやはある。とりどりにいとめでたけれど、うち大人

びたまるるに、いと若う美しげにて、せらに隠れたまへど、

おづから漏り見奉る。母御息所も影だに覺えたまはぬを、

※3 「いと、よう似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心

地にとあはれと思ひ聞こえたまひて、「帝に参らまほしく、

※4 なつさひ見たてまつらばや」と覺えたまふ。

上も限りなき御思ひどらにて、帝「な録みたまひぞ、奇しくよそ

へ聞こえつべき心地なむする。『なめし』と思きて、艶たくした

まへ、面つき・目見などはいよいよ似たりしゆゑ、通ひて見え

たまふも似けなからずなむ」など聞こえつけたまへれば、幼心

地にも、はかなき花・紅葉につけても心ざしを見え奉る。

こよなう心寄せ聞こえたまへれば、弘徽殿女御、またこの宮と

も御仲ぞほほしきゆゑ、うち添へて、もとよりの憎きも立ち

※5 出でてもしと思したり。『世に類なし』と見奉りたまひ、

※6 名高うおはする宮の御容貌にも、なほ何はしは例へお方なく、

※7 美しげなるを、世の人「光る君」と聞こゆ。藤壺並びたまひて

※8 御覚えもとりどりなれば、「輝く日の宮」と聞こゆ。

人聞図係図

×更衣

桐壺帝

第二皇子(皇太子) 14

弘徽殿女御

藤壺宮 11

第二皇子(源氏の君)

藤壺宮さまを「輝く日の宮」と申しあげます。

源氏の君を「光る君」と申しあげます。藤壺宮さまは源氏の君

と肩を並べなさつて帝さまからの二寵愛もそれぞれに厚いので

ようもなくすばらしく、いかにも愛らしいので、貴族たちは

つしやる皇子の東宮(皇太子)さまのお顔立ちや容姿と比べ

とかわいがり申しあげて、貴族たちからも高く評価されていら

しやいます。弘徽殿女御さまが「この世に比較する人がいない」

もよみがえつてきて、源氏の君を氣に食わないと思つていらつ

まどもお仲が悪く、そのうえに亡き桐壺の更衣に對する憎しみ

てお難い申しあげます。弘徽殿女御さまはまだ、この藤壺宮さ

た春の桜の花や秋の紅葉につけて、「自分の氣持ちをお見せし

げなさいましたので、源氏の君は子供心ながらも、ちよつとし

「麗になるのも無理もないことなですよ」などと頼み申しあ

へてやりましたので、源氏の君は子供心ながらも、ちよつとし

い。どういふわけが私は不思議にあなたがあの子の亡き母と瓜

二つに見えます。あの子を『無礼者』とお思いにならず、かわ

いがつてやつてくださ。あなたの顔つきや目元が亡き母にほ



飛香舎 (藤壺) から見た中庭

源氏の君は父上の帝さまの右側を離れなさいないので、帝さまがたまに通いなさいるお部屋の前さまは、源氏の君からお姿を隠しなさいます。ましてしほは帝さまが通いなさいるお部屋のお后さま(藤壺宮)は、そういうも源氏の君を取かしがつて姿を隠してははいられませんが、どのお后さまも「自分は他の后に劣つていらつしやうか。と思つていらつしやうか。そんなお方はいらつしやうか。どなたもそれぞれにお美しいのですが、皆、少し年を取つていらつしやいます。そのなかで藤壺宮さまだけはいへん若く、かわいらしくて、しきりに源氏の君から隠れなさいますが、源氏の君は自然に物の隙間から盗み見なさいます。源氏の君は母御息所さま(桐壺の更衣)のことは面影すら覺えていらつしやらないですが、藤壺宮さまは亡きお母さまとほんとうになく似ていらつしやいます。」と典侍が申しあげましたので、源氏の君は幼心にも藤壺宮の「とかひとく慕わしくて、いつもお側にいてもと親しくなりた